

沖縄県 JICA 海外協力派遣実績



<https://www.jica.go.jp/okinawa/>

JICA沖縄

独立行政法人 国際協力機構 沖縄センター

〒901-2552 沖縄県浦添市字前田1143-1
TEL : 098-876-6000

2022年3月



日本も元気にする JICA 海外協力隊

～ 沖 縄 ～
Vol.2



OKINAWA

WORLD

世界を変えてきたのは、いつの時代も、たったひとりの強い想いだ。

何度もぶつかり、挫折しながら、それでも、たったひとりが自分の想いを貫くことで、

やがて無数の人の心を動かしていく。

あなたもここで紹介する 10 名のように、
沖縄と世界に“変化とインパクト”をもたらすメンバーになってみませんか。



ひが かなえ
比嘉 可苗 [ニカラグア共和国・グアテマラ共和国/助産師] P03
【現在の仕事】 看護専門学校の教員



すがわら こうた
菅原 耕太 [マダガスカル共和国/村落開発普及員] P05
【現在の仕事】 一般社団法人みんなのももやま子ども食堂



みやぎ こうた
宮城 晃太 [カンボジア王国/サッカー] P07
【現在の仕事】 Angkor Tiger FC (アンコールタイガー FC)



きんじょう ちあき
金城 千秋 [ラオス人民民主共和国/小学校教育] ・ P09
【現在の仕事】 那覇市立古蔵小学校 小学校教諭



いは さとこ
伊波 さと子 [ボリビア多民族国/小学校教育] ・ P11
【現在の仕事】 竹富町立西表小中学校 小学校教諭



きんじょう あきこ
金城 明子 [ペルー共和国/環境教育] P13
【現在の仕事】 特定非営利活動法人おきなわ環境クラブ



みやぎ ゆうや
宮城 勇也 [セルビア共和国/障害児・者支援] ・ P15
【現在の仕事】 株式会社チョモランマ (外国人材の就労支援)



あずま まさふみ
東 雅史 [バプアニューギニア独立国/感染症・エイズ対策] P17
【現在の仕事】 沖縄県北部保健所 地域保健班



なかざと みかる
仲里 みかる [フィリピン共和国/観光] P19
【現在の仕事】 南城市役所



とぐち しょうこ
渡久地 正子 [ドミニカ共和国・ブラジル連邦共和国/日系日本語学校教師] ・ P21
【現在の仕事】 日本語教師

INTERVIEW

ひがかなえ
比嘉可苗

北中城村出身。沖縄県立中部病院勤務中、現職参加でニカラグアに赴任。情勢悪化のためグアテマラに振替派遣。現在は看護専門学校教員や、助産師として出張型保健指導を行う。



・派遣国・

ニカラグア共和国・グアテマラ共和国
Republic of Nicaragua・
Republic of Guatemala

・活動分野・

助産師



ライフプランを考えている生徒を見守る

親子2代で協力隊員に

海外協力隊としてマレーシアに赴任したお父様の背中を追いかけて、親子2世代海外協力隊になった比嘉さん。「小さい頃から海外協力隊に憧れ、中学生のときに助産師だった養護教諭の影響を受けて、生命の誕生に携わりたいと助産師になりました」と話します。

助産師隊員の必須条件をクリアするため、助産養成学校卒業後は、最後の砦として僻地医療の役割も担っている県立中部病院周産期センターに勤務。出会った妊婦さんから多くのことを学び、語学力を身につけるため JICA の研修員たちと交流を深め、計画的に準備を進めたおかげで、見事1回で合格。現職参加制度で海外協力隊への道を歩み始めました。



信頼関係構築に尽力する

2018年8月からグアテマラに派遣され、首都からバスで6時間のキチェ県サン・バルトロメ・ホコテナンゴ市にある唯一の診療所で活動をスタートさせました。先住民が多く暮らす任地では、過去の内戦の影響で外部への警戒心が強く、アクセスも悪いことから診療所を利用する人は少なく、自宅出産が8割を占めていました。

「自宅出産を介助するのは、マヤ系の伝統文化を用いた伝統的産婆です。専門教育を受けたことがなく、出産経験の多い人や伝統的産婆に弟子入りした女性たちが伝統的産婆となり、カラフルな民族衣装を身にまとい、誇りをもって活動していました。ハサミや靴ひもなどの日用品を使って分娩の介助をするのには驚きましたが、帰国後、自宅出産をサポートするようになった今では、モノや数値だけに頼らず経験と感覚も大切に考える方が理解できます」。



診療所で生まれたばかりの赤ちゃんを同僚スタッフとケア

診療所の医療スタッフと伝統的産婆の間には信頼関係があまり築かれていなかったため、妊婦が死亡するケースも少なくありませんでした。そこで比嘉さんは、活動目標に妊産婦・新生児死亡率の減少を掲げ、国際協力 NGO「AMDA 社会開発機構」が開催していた伝統的産婆の研修会に講師として参加することになりました。

「伝統的産婆と信頼関係を築くため“日本から来たので教えてください」と、尊敬の気持ちで接しました」。そんな比嘉さんの姿を見てか、医療スタッフと伝統的産婆の関係に少しずつ変化が現れてきました。母子に危険兆候があると診療所に連絡するケースが増え、3年ぶりに妊産婦死亡数ゼロを達成し、共に喜び合ったのです。ほかにも医療スタッフへの研修や 5S 活動、他団体との協働など活動の幅

を広げる中、「本当に役に立ったのだろうか？」という疑問を感じていたとき、同僚のスタッフから「遠い国から来て活動してくれてありがとう、これからは私たちが頑張る」との言葉ももらい、ホッと胸をなでおろしました。

心ときめく道へ欲張りに

「沖縄のために助産師として生きる」と決め帰国し1週間で職場に復帰。新型コロナウイルス感染症が流行し患者の対応に追われる中、「助産師として何がしたいのだろう」と自問自答する日々が続きました。ジレンマを払拭するため、コロナ禍で不安を感じる助産学生をサポートする団体「琉球 midwife」を仲間4名と立ち上げたり、オンラインでの相談を始めたり、助産師としての道を探ります。

「産後うつなどの相談をうけるうちに、あの伝統的産婆のように地域に暮らす女性や家族に伴走する助産師になりたい」と決意し病院を退職。その後大阪の助産院で約半年の修行を積みました。現在は、看護教育関係のお仕事に携わりながら、北中城村で「助産院 花鳥風月」を開業し、出張型保健指導やオンライン相談などを行っています。

「肌感覚で学べる協力隊は貴重な時間です。私のモットーは、欲張りでもいいのでご縁を大切に心ときめく道を進むことです。海外協力隊を目指す皆さんにも、人生一度きり、心ときめく道に挑戦してほしいと思います」。



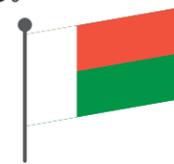
性教育を開催したキチェ県内小学校にて



INTERVIEW

すがわら こうた
菅原 耕太

千葉県出身。大学を卒業して旅行会社に務めたのち、2007年に海外協力隊へ参加。帰国後は通信制高校で教師を経験し、沖縄へ移住。現在は子ども食堂の運営に携わる。



・ 派遣国 ・

マダガスカル共和国
Republic of Madagascar

・ 活動分野 ・

村落開発普及員
(現：コミュニティ開発)



海外協力隊へ憧れを抱き任地へ

「雷に打たれたくらい衝撃的でした」菅原さんが初めて海外協力隊のことを知った時、そんな鮮烈な印象を受けたそうです。中学生の頃に隊員経験者の講話を聞き、活動時の写真を見せてもらったという菅原さん。現地での楽しそうな様子や隊員のキラキラとした表情が眩しく見えたことから、「いつか自分も」と夢を描くようになります。

大学を卒業すると、旅行会社で社会人経験を経て海外協力隊への参加を決意。「僕が持っているのはロマンと気合いだけ。さまざまな職種の中でも幅広い活動ができる分野で、それも自分にとって未知の場所へ応募しました」。そして、2度目の応募で派遣が決まったマダガスカルへと飛び立ちました。



子どもたちの笑顔に囲まれて



国際協力の在り方を見つめ直し 自身の価値観が一変

「派遣当初の自分を今思い起こすと、すごく夢見がちだったなと。現地の生活レベルの向上を図るというミッションを遂行するんだ！と張り切っていましたが、実際はその国の言葉も話せないし経験もない。住民たちに『何をしに来ている人か』を説明するところから始めて。逆に『ここでいろいろ学んで帰りなさい』と言われていましたね」。限りある活動期間で成果を残さなければいけないプレッシャーと、現地でどのように活動を進めていくべきか糸口が掴めず、挫折感を味わったそうです。



現地との距離が少しずつ縮まっていった

このことから、国際協力の在り方についての価値観も大きく変わったと話します。「地元暮らしを見ているうちに、そもそも本当に協力を欲しているのか？ ボランティアとは何か、という疑問が湧きました。一見足りないようでも、彼らには今まで積み上げてきた歴史や生活スタイルがあり、しっかりと暮らしている。そこに敬意を持たずして活動するのは、とても失礼でおこがましいことだと思いました」。

大切な気づきを得て以来、菅原さんは「やってあげよう」から「一緒にやってみませんか？」という姿勢に転換し、少しずつ現地の人々との距離を縮めていったといいます。そうして任期中には、クバーラというスポーツを通して子どもたちの余暇活動を充実させる取り組みを推進。現地の教育機関で働く熱意あふれるスタッフと連携して、交流大会を開催しました。さらに、成長速度が早く栄養価も高いことで注目される樹木・モリンガの植林を普及する活動にも尽力するなど、最終的には充実した2年間を過ごすことができました。



相手を尊重してお節介を焼く

帰国後は通信制高校の教員として勤務。そこに通う生徒たちは、勉強が苦手な子や不登校を経験した子も少なくなく、10代後半の若者たちがなぜこれほど苦しんでいるのかと驚いたそうです。「過去に負った傷が癒えていない子どもたちが多い現状を目の当たりにし、それならば、もっと小さいうちから関わりたいと思うようになりました」。

それから6年半勤めた高校教員を退職し、2015年に母親の故郷である沖縄へ移住。たまたま見た新聞記事をきっかけに新たに関わることになったのが、沖縄県内で初めて開所した子ども食堂です。そして菅原さんは今、海外協力隊で学んだ「相手を尊重しながら、お節介を焼かせてもらう」姿勢を大切にしながら、子どもたちと週5日の食事を囲んで楽しく過ごしています。

今後の目標は、地域の高齢者も誘って、もっと中高生が気軽に集まれる居場所をつくること。最後に、海外協力隊を目指す人へ向けて「全く違う環境へ飛び込むなら、自分の眼鏡をすぐに外せるほうが楽しく過ごせると思います。また、自分の趣味や好きなことを一つ持っていくと、現地での気分転換にもなるのでおすすめです」と、エールを送ってくれました。



お別れ会は連日約1か月してもらいました

INTERVIEW

みやぎ こうた
宮城 晃太

那覇市出身。FC 琉球に入団。引退後アカデミーコーチを経て、サッカー指導としてカンボジアに派遣。現在、カンボジアプロチームのアシスタントコーチを務める。



・ 派遣国 ・

カンボジア王国
Kingdom of Cambodia

・ 活動分野 ・

サッカー



サッカーの素晴らしさを伝える指導者に

大学卒業後、沖縄のプロサッカーチーム FC 琉球に入団し、チームメイトのブラジル人選手を通じてポルトガル語を覚え外国人と交流する楽しさを知ったという宮城晃太さん。これまで抱いていた「海外に出てみたい」という漠然とした思いが現実味を帯びてきました。「知人から JICA の情報を得て応募した職種は、大学で取得した教員免許を活かす体育でしたが、FC 琉球でユースのコーチも経験していたので、面談のときにサッカー指導の派遣に変更になるかもしれないと言われました。大好きなサッカーで海外に貢献できるのであればチャレンジしたいと思っていたので、喜んで書面にサインをしました」。

合格後、蓋を開けてみるとサッカー指導に変更になり、カンボジアへの派遣が決まりました。



試合のハーフタイムにホワイトボードでチームメイトに説明する選手



プライベート時間も有効活用

カンボジアの知識が全くなく派遣前までは「スパイクもない過酷な環境では」と思っていたのですが、良い意味でイメージは覆されました。カンボジアサッカー協会では、2023 年カンボジアで開催される東南アジア版五輪「SEA Games」に向けて地方から代表選手を輩出できるように各州にアカデミーを設立し、若い選手の育成に力を入れていました。宮城さんは、そのうちのひとつクラチェ州のクラブへ派遣されました。

「当初のイメージよりも環境が整っていたので、カンボジア代表選手を出すという大きな目標を掲げました。またこのころ本田圭佑氏がカンボジア代表監督に就任していたこともあり、サッカー熱は高まっていました。あわよくば一緒に仕事ができたらと思いましたが、それは叶いませんでした（苦笑）」。



クラチェアカデミーの練習風景

私が配属されていた所属先では U-18 選手は 25 名ほどいましたが、練習に参加するのは 10 名に満たないことも。試験に合格しないと上の学校に進めない学業優先のカンボジアでは、練習を休むことは日常茶飯事。そこで宮城さんは「グラウンドで待っている」という動画を選手宛に送り、練習に出るように呼びかけました。

「コーチと選手ではなく一緒にサッカーを楽しむ友だち関係を意識しました。プライベートでカフェに出かけたり、社会人チームの練習試合の動画を観戦しながらディスカッションしたり、一緒に楽しむ時間を多くとり、関係性を深めながらクメール語も学びました。カンボジアの人々は親日派が多く、JICA への理解も深く『いつも助けてくれてありがとう』と感謝の気持ちで接してくれて活動しやすい環境に恵ま

れました」。

また「ひとりでいることはほとんどなかった」というほど、現地の人の懐に飛び込むことで多くの友人に恵まれた宮城さん。その明るいキャラクターはプロサッカーチームに届いていたようです。

肌感覚で多様性を知る機会

海外協力隊での 2 年の任期中では、カンボジア代表1名と候補者数名を送り出すこともできました。サッカー指導やクラチェ州での生活など JICA での活動を発信していた Instagram、Facebook、Twitter がカンボジアプロサッカーの目に止まり、「アンコールタイガー FC」からオファーを受け、2021 年、アシスタントコーチに就任しました。

「今の目標は、より多くの代表選手を生み出し、いつかはカンボジアプロチームの監督になること。将来的には海外での経験を活かし沖縄のサッカーに関わり盛り上げたいと思っています」と人懐っこい笑顔で語る宮城さん。これから海外協力隊を目指す人には「JICA を経験したことで、人間味が深まり成長できました。海外に行きたい人は JICA を活用して、肌感覚で多様性を楽しんでほしいと思います」と力強いエールを送ってくれました。

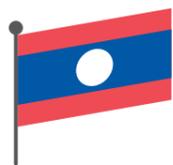


クラチェアカデミーの選手たち



きんじょう ちあき
金城 千秋

那覇市出身。小学校の現職教員。2018年教師海外研修へ参加。その後、現職教員特別参加制度を活用し2021年から海外協力隊としてラオスへ赴き、教員養成校で教鞭を執る。



・派遣国・

ラオス人民民主共和国
Lao People's Democratic Republic

・活動分野・

小学校教育



海外協力隊へのきっかけは「外の世界を知りたい」という思い

初めてラオスを訪れたのは3年前の教師海外研修。第一印象は居心地の良い国でした。その年末、今度は一人でラオスを再訪。現地の隊員や海外協力隊経験者のメンバーと過ごすうち、なぜこんなに生き生きとしているのだろう。自分は外の世界を何も知らないのではないかと疑問を抱きました。「その頃は忙し過ぎて、何の為に働いているのかわからなくなるほどでした。そんな時に海外協力隊経験者の皆さんとふれあう中で、人としての経験を積み、そしてその経験を子供たちに伝えることが出来たらどんなに素晴らしいだろうと考えるようになり、自分のためにも生徒のためにも海外協力隊になりたいという思いが芽生えました」。



同僚とお昼ごはん



ラオスにおける「日本式・算数授業改善」をサポート

2021年8月に今度は、海外協力隊として再びラオスへ。隔離期間や移動制限などのコロナ禍の困難を経て11月からビエンチャン県にある教員養成校でラオス人の先生方と一緒に算数の指導法を教えています。とはいえ当初の授業はオンラインでした。「オンライン授業では学生は全員画面OFF、いるかいないかもわからない相手に拙いラオス語で授業をしなければならぬという状況はかなり辛かったです。でも、私の拙いラオス語に反応して画面をONにする子や通訳をする子が出始めて、私を助けてくれました」。



バンクン教員養成校附属小の児童たちと

それより大変なのが書類の読み書きだとか。学校への計画書などはラオス語のみ。それでも頑張って「放課後算数教室」の企画を通しました。「ラオスは今、初等教育の算数授業改善のため日本式教科書が導入され、教師を対象に教科書活用研修も行われています。私も、教材・教具の使い方やゲームを通して算数を教えるなど、日本同様に算数を楽しく学べるよう、現地の先生方と力を合わせ学びの改善に取り組んでいます」。

ラオスの人はみな温かいという金城さん。「先生方や大家さんは私を見るたび『ご飯食べた?』と気遣ってくれ、ボランティアに来たはずなのに私の方が支えられています」。そのお返しに大家さんに人参シリシリをふるまったり、バレンタインに手作りサーターアングギーを先生方に贈るなどして親交を深めているとか。活動の自己評価を伺うと「ラオスを楽しんでいるかと聞かれたら95点!ですが協力隊としては20点。帰国までに100点にします」。

ラオスでの体験と学ぶ楽しさを子どもたちに伝えていきたい

海外研修で実感したのは、日本の当たり前が世界の当たり前ではないということ。ラオスで備品不足や、幼い兄弟を抱っこして授業を受けるなどの物理的・人的な環境の違いを目の当たりにし、日本の教育の豊かさを改めて実感しました。海外協力隊派遣前に古蔵小で行った授業では、ラオスの主食の餅米を手で食べたり、現地隊員へのテレビ電話取材や国際協力出前講座などを通してラオスの様子やJICAの活動を生徒に伝えました。「看護師になりたいと言っていた子が世界に通用する看護師になりたいと話したり、サッカーの仕事をしたいと言っていた子が語学に興味を持ち始めるなど、意識が外に向ききっかけになったと思います。JICAの活動は特別な人じゃなくてもできることはきっとあるので、少しでもやりたいと思うならやってほしい。私も今応募して良かったと心底思います」。

帰国後の目標は自分の体験を子どもたちに伝えること。「ラオスに来て、日本のことや語学をもっと学んでおけば良かったと勉強不足を悔いています。力を発揮するにも選択の幅を広げるにも勉強は大事。帰国後は子どもたちが学びたいと思えるように学ぶ楽しさや意義を伝えたいし、自分も身近な人も大事にできる、幾つになっても人生を楽しめる人になりたい」と、笑顔で話してくれました。



教員養成校の学生たちへの算数授業



INTERVIEW

伊波 さと子

うるま市出身。大学卒業後に臨時教員を務め、2010年にボリビアで日本語教師を経験。2016年から海外協力隊として2度目のボリビアへ。現在は西表島の小学校で勤務。



派遣国

ボリビア多民族国
Plurinational State of Bolivia

活動分野

小学校教育



過去の経験を活かし
海外協力隊として同じ地で再始動



イラストを使った日本語の授業

伊波さんが国際協力に興味を持つようになったのは、中学生の頃。英語の教科書で JICA の活動を知ったことから、いつかは海外へ渡ってみたいという憧れを抱きます。大学を卒業してからは、南米・ボリビアにあるオキナワ移住地で働く機会に恵まれ、2年間にわたり日本語教師を務めました。帰国して小学校教諭に本採用された後も、「現地の方々に良くしてもらったこともあり、もう一度あの地へ（海外協力隊で）行きたいという想いが強くなりました」と振り返る伊波さん。2016年からは JICA の現職教員特別参加制度を利用し、再度ボリビアで活動することになりました。



ブレない心で伝えた想い

配属先のオキナワ移住地（コロニア・オキナワ）は、1954年から計画移民により海を渡った沖縄県人たちが築き上げてきた「もう一つの沖縄」と呼ばれる場所。伊波さんが現地に関わった人々は、日常会話程度の日本語を話す人も多く、思いのほか溶け込みやすい環境だったそうです。当時ミッションとしていたのが、日本語を教えながら移住地の歴史についての知識を深めてもらうこと。そして、キャリア教育や道徳をはじめとした日本特有の授業内容も取り入れ、現地の子もたちがよりよい教育を受けられる環境づくりに貢献することでした。「活動してみると、国語と日本語は全く違うものなのだと気づかされました。例えば『雨がシトシト降る』『水をゴクゴク飲む』という擬音語は、日本人であれば取って代わらなくても何となく通じますよね。でも、日本語を母国語としない人たちにこれらの表現や感覚をどう理解してもらえばいいのか、



いつもあたたかく迎えてくれる以前の教え子たちと

すごく悩みました」。日本語を教える難しさを実感してからは、漫画やイラストを教材として取り入れ、ロールプレイでの実践練習をするなど試行錯誤を重ねたという伊波さん。「大変でしたが、やりがいがあった楽しかったです」と、笑顔を浮かべます。

さらに、キャリア教育の一環として企画した職業体験イベント「お仕事ひろば」も、大きな思い入れがある取り組みのひとつになりました。別の任地で活動する JICA の隊員たちに声をかけ、子どもたちが多様な職種を体験できるブースを設置。保護者が軽食を用意してくれるなど、さまざまな人たちの協力のおかげで大盛況のうちにイベントを終えることができました。「最初はあれこれやってあげよう！と意気込んでいましたが、実際は日本のようにモ

ノも揃っていない状況の中、一人で行うことなんて全然なくて。でも、『モノがない=不幸』では決していない。現地の人々が一からモノを作って工夫をしている姿に、『本当の豊かさとは何か』と考えさせられました。現地では私が教えることより、人に教わったり、気づかされたり、得ることのほうが多かったです」。

沖縄とボリビアの“繋ぎ役”へ

2年間の海外協力隊の任期終了後、小学校職員として復帰した伊波さんは、ボリビアでの活動経験が活かされる場面が多いといいます。最近も「世界のウチナーンチュの日」に合わせて、ボリビアの教え子と現生徒たちとの交流を図る授業を実施。国際理解教育やキャリア教育に関わるうえで、子どもたちに説得力のあるメッセージを伝えることができるようになったと感じています。「これからも、ボリビアと沖縄を繋げる存在でいたいと思います。それに、子どもたちにはたくさんの人や良いモノ、新しい事にどんどん出会ってほしいです」と話す伊波さん。「今は目の前にいる子どもたちや自分が関わる人たちの夢や挑戦を後押ししていきたい」と目を輝かせます。



現地の学校で日本文化や沖縄文化を紹介



INTERVIEW

きんじょう あきこ
金城 明子

糸満市出身。大学卒業後に勤めた環境団体での経験や東日本大震災でのボランティア活動に影響を受け、2016年から海外協力隊へ。現在は「おきなわ環境クラブ」で勤務。



派遣国

ペルー共和国
Republic of Peru

活動分野

環境教育



学校訪問によるごみ問題の普及啓発活動

やりたいことを叶えるために

金城さんが環境分野に興味を持つようになったのは、社会人となり「もっと地域社会と関わる仕事したい」という想いと、環境団体に転職したことがきっかけでした。また、東日本大震災の被災地でボランティア活動に参加したことも、大きな分岐点となります。「住む場所や年齢、職業も全然違う人たちが同じ想いを持って活動するところに、社会貢献の喜びや魅力を感じました」と話します。そんな時、職場の同僚や周囲の隊員経験者から話を聞き、海外協力隊の活動に対する関心を強めることに。金城さんの中で、環境問題への取り組みと途上国への貢献活動という2つのやりたいことが結びつき、海外協力隊への参加を決意することとなります。



試行錯誤で実らせた活動成果

環境教育隊員として向かった先は、南米のペルーです。近年急速な経済発展を遂げているペルーでは、ごみ処理施設の整備が追いついておらず、街中にごみが散乱している状態でした。金城さんが配属されたのは、現地市役所の環境課。そこで問題の改善に向けて、地域の学校などを巡回しながら、ごみの分別リサイクル推進の普及啓発活動に取り組んだそうです。



生ごみなどを活用したコンポスト(堆肥)作りの様子

現地では行動を共にするメンバーが短期間で入れ替わるため、活動当初は成果に自信が持てずいた時期も。「スタッフが交代する度に一から説明をして…という感じでしたので。これまでの活動がきちんと積み重なっているという感覚がありませんでした」と、不安を抱えていたといいます。それでも「今できることをやるしかない」と、写真やデータで活動内容の記録を細かく残し、情報共有の徹底を意識。同僚たちが円滑に活動できるよう工夫したことで、これまで何気なく続けてきたことの成果が目に見えて分かるようになっていきました。「1年目と2年目を比べると、チームワークができたことで活動テーマが増え、改善した点が実際の数値に表れていたんです」と、嬉しそうに当時を振り返ります。

海外協力隊としての活動のほかにも、ペルーでの生活は金城さんにたくさんの刺激を与えてくれました。「海外に出てみて、改めて日本の良さや沖縄出身というアイデンティティを再確認することができました。現地の方々の大らかで温かい人柄にもすごく支えられたので、今度は私も「次の人に恩を送る」という気持ちで、海外の人に接することができればいいと思います」。

次世代に活動を引き継ぐ役割へ

海外協力隊の任期を終えて帰国した後は、水辺の環境保全を中心に活動するNPO法人おきなわ環境クラブに所属。これまでの経験を活かしながら、次世代に向けて、地域の河川ごみ削減のための環境教育や、日系社会を対象とした沖縄観光のJICA研修員の受け入れも行っていきます。研修には世界各地から優秀な研修員たちが集まってくるため、提供する側の知識のアップデートが欠かせず、自身もまだまだ学ぶことが多いといいます。

実は海外協力隊での活動以前は、人前で話すことが苦手だったという金城さん。「スペイン語を使うペルーでの活動と比べたら、日本語で話ができる仕事はなんて気が楽なんだろう！」と、あがり症を克服できたのだとか。現在は忙しい毎日を送りつつも、生き生きと業務に向き合っています。「時々ふと『もしペルーへ行っていなかったら、一体今頃何をしていたんだろう?』と考えるくらい、海外協力隊での経験が貴重な財産となっています。現地で出会った子どもたちは今もやり取りが続いていて、現地のごみ問題の近況報告をしてくれたり、テレビ電話をすると涙を流して喜んでくれる子もいて嬉しくなります。またいつか必ず、ペルーを訪問したいと思っています」と想いを寄せます。



子どもたちが描いた地域の自然環境の絵



INTERVIEW

みやぎ ゆうや
宮城 勇也

沖縄市出身。セルビアへの海外協力隊第1号。帰国後は外国人の就労支援業務に従事。東京オリンピック・パラリンピックではセルビア選手団のサポートスタッフも務めた。



・派遣国・

セルビア共和国
Republic of Serbia

・活動分野・

障害児・者支援



特別支援学校の体育の授業

セルビアー択の強い気持ちで、
憧れの地・セルビアへ

海外協力隊との出会いは小学校での海外協力隊経験者による出前講義。さらに、尊敬する高校時代のテニス部監督も海外協力隊経験者だったこともあり「いつかは自分も」という思いが高まりました。ただその頃はまだ何ができるのかわからなかったという宮城さん。その後、大学で心理学を学び、児童相談所で児童心理司として働いた後、障害児・障害者支援の海外協力隊としてセルビアへ赴任しました。

実は、学生時代をテニスと共に歩んできた宮城さんにとってテニス大国・セルビアは憧れの地。JICA が初のセルビア派遣を行うと聞き「第1号になりたい。希望地はセルビアー択」



という強い思いで参加を決意。憧れの地で「スポーツを通じた障害児・障害者支援」という夢を実現しました。

コロナ禍で感じた、
変化に強く人に優しく、という思い

派遣先は首都ベオグラードで、障害者スポーツ協会を拠点に、特別支援学校での子どもたちへのスポーツ指導やスポーツを通じた障害者の社会参加支援、戦争で障害を負った方へのフィジカルトレーニングやパラリンピックに出場経験のあるアスリートに向けた練習環境整備やスポンサー探しなど、スポーツを軸にさまざまな障害者支援に奮闘。「セルビアは大柄の人が多く最初は『この小さなアジア人が指導するの?』という感じで受け入れられるまでは苦労しました。でも、テニスと水泳、空手には多少自信があったのでやって見せたらようやく認めて



テニスクラス

くれました。そこで改めて実際にやって見せることの大切さを学びました。前例のない地ということで不安もありましたが、下準備としてセルビアについて学んでいたことがコミュニケーションをとる上で非常に役に立ちました。セルビア人は家族を大切にす民族で親日家も多い。くじけそうな時は人の温かさに支えられました」と、宮城さん。

派遣中はコロナによるパンデミックが起きたことで予想外の苦労も。「スポーツ活動ができなくなったことも大きかったのですが、アジア人だからとバスの中で距離をあけられたり、子どもたちからコロナと呼ばれたり。スポーツ指導は距離が近いことから現地の人に敬遠される場面もありました。これは防衛意識からくる自然な反応だと分かってはいますが、ショックでした」。



一方、セルビア人からは「今を生きる」ということも学びました。「僕は沖縄戦のいわゆる3世ですが、2000年代まで戦禍にあったセルビア人にとって戦争は未だ身近な出来事であり、彼らからは今日を一生懸命に生きるという思いを強く感じました。コロナに限らず“非日常”はいつでも起こり得るので、変化に強くなりたいし優しい人でありたいと思うようになりました」。

セルビアでの経験を糧に、
マイノリティ支援に尽力します

帰国後は外国人の就労支援企業に勤務し、外国人労働者と受入れ企業、両方のサポートに従事。「僕たちが生きるこの先の日本は外国の方の手を借りなければ社会が回りません。日本企業と外国人労働者とのマッチングからフォローアップという入口から出口まで、故郷を離れて働く人々の思いと人材育成の観点を大切にしながら、労働者不足という大きな課題に取り組んでいます。セルビアで外国人というマイノリティな存在となった経験は良くも悪くも貴重な体験でした。その時感じた思いがマイノリティ支援という今の仕事に繋がっています」。

外国人の活躍の場を拡充すべく、2022年の春から、信頼する同業者のいる北海道へ拠点を移す宮城さん。最後に「海外協力隊への参加は貴重なライフイベントでしたし、僕の人生を大きく変えてくれました」と、笑顔をくれました。



ハーフマラソンに出場（ベオグラードマラソン）

INTERVIEW

あずま まさふみ
東 雅史

うるま市出身。沖縄県立看護大学、琉球大学大学院にて修士号取得。パプアニューギニアでマラリア感染予防を広める活動に参加。現在、北部保健所に勤務。



・ 派遣国 ・

パプアニューギニア独立国
Independent State of Papua New Guinea

・ 活動分野 ・

感染症・エイズ対策



海外協力隊参加の地盤固めを

「離島の看護師になりたいくて県立看護大学で学んでいるとき、国際保健や国際協力の講義で、離島と開発途上国が抱える課題にはヒト・モノ・金がないという共通点があることを知り、どうせやるなら海外でやってみたいと思いました」と東雅史さんは海外協力隊に参加するきっかけを話します。

英語が苦手なため語学習得に不安を抱いていたため、ワーキングホリデーを利用して実践的に身に付け、帰国後は大学院で国際地域保健をより深く学び修士号を取得。ラオスでマラリア感染症の研究に携わるなど、海外で医療活動を行うための地盤固めに努めました。



世界国際エイズデーにて無料検査の実施



三線披露で沖縄文化も伝える

保健師として派遣先されたパプアニューギニアは世界有数の多民族国家として知られ、東さんが赴任したケビエンだけでも 30 民族が暮らしていました。英語のほか公用語のピジン語も習得していましたが、教育を受けていない老人たちと話すためには現地スタッフの通訳が必要だったといいます。



入院患者へ向けた三線コンサート

「同僚たちは時間にルーズで 2 時間遅れてくるのは当たり前。ブアイというたばこのような嗜好品を噛む休憩をとるのですが、そのまま帰ってこないこともあり、活動がうまく進まなくて困りました。自らの態度で示すしかないと思い、時間前に出勤して掃除をしたりあいさつをしたり、日本では当たり前のことを徹底しました」。

主な活動はマラリア感染予防の啓発です。村民たちはマラリアの知識がなく、病院への移動手段もないことから放置していることが

少なくありませんでした。病院に行けば無料で薬がもらえることや蚊帳を吊ったり長袖の服を着けたり、虫よけスプレーを使うなどの予防対策を伝えることに力を入れました。

「活動中は、教会や市場など人が多く集まる所に出向いて、パソコンを使って講義をしました。電源がないところや子どもが多いところでは、紙芝居を活用しようと提案しましたが、現地の同僚たちからは『紙芝居なんて意味があるのか。お前ひとりだけでやれ』と不満が出ました。同僚たちはには面倒くさがり屋もいて仕事を増やしたくないんです。それでも続けるうちに子どもたちから『蚊帳を使っているよ』といった反応があり、アンケートの回答で紙芝居が効果的だと知り、手伝ってくれるようになりました」。



面倒くさがり屋で時間にもルーズですが、陽気で感情を素直に表す人柄に触れ「こんな生き方もいいな」と思った東さん。同僚の家に遊びに行ったり、祭りの踊りに参加したり、積極的に現地の人と触れ合いました。さらに海外協力隊の仲間と一緒によさこい節を披露したり、得意な三線を路上や患者さんの前で演奏したり、日本や沖縄の文化を伝えられたことは貴重な体験だったといいます。

物怖じしない度胸がついた

帰国後は沖縄県新型コロナウイルス感染症対策本部での非常勤を経て、沖縄県北部保健所で保健師として母子や難病、精神疾患の患者さんへの個別支援を行っています。

「JICA の活動では村長などに依頼交渉する機会が多く、物怖じしない度胸がつかえました。私も面倒くさがり屋で腰が重かったのですが、悩む前にまずは動くという行動力も身につきました。以前の私だったら患者さんへの声かけも躊躇していましたが、何か困っていることを察知したらすぐに行動するようになりました。また、日本に戻り情報の多さに気づき、目の前のことに集中するためテレビやネットを見なくなり情報に対する価値観も変わりました」。

海外協力隊では、自分の個性や長短所を発見したという東さん。JICA の活動は己（自ら）の殻を破り自信をつける最適な機会だったと振り返ります。



小学校にてマラリア、結核等の予防啓発活動

INTERVIEW

なかざと みかる
仲里 みかる

南城市出身。南城市役所企画課に勤務していた 2016 年に、現職参加制度を活用し海外協力隊に参加しフィリピンへ。現在は育児休暇中だが半年後に復職予定。



・ 派遣国 ・

フィリピン共和国
Republic of the Philippines

・ 活動分野 ・

観光



「観光客拡大」というミッションを
携えフィリピンへ

仲里さんが海外協力隊に参加したのは、JICA 草の根技術協力の「南城市モデルを活用したヴィクトリアス市アグリビジネス／アグリエコツーリズム強化プロジェクト」に携わったことがきっかけでした。「留学はおろか海外旅行の経験もなかったのですが漠然と海外で働いてみたいという思いがあり、JICA のプロジェクトに触れて、これに関われば楽しそうだという興味本位で応募しました」。そして、派遣先のフィリピン・ヴィクトリアス市から「観光客拡大」というミッションを託された仲里さんは、その新事業の実現に向け、企画～予算獲得～実行という全工程の中心に立ち、現地スタッフを先導しました。



風の旅行社さんによる
バードウォッチングツアー視察



真の目標は、地元への利益還元と
持続可能な仕組みづくり

観光客拡大のため仲里さんは、ヴィクトリアス市の観光プロモーション VTR の制作、バードウォッチングを軸とした旅行ツアーの商品化、沖縄とフィリピンの異文化交流といった事業を次々に企画しました。

「プロモーション VTR では同市のキャラクター・トリイが小学校を回って子どもたちとダンスを踊る様子を撮影し、SNS で話題を集めました。バードウォッチングツアーでは、ASEAN 諸国への優れた旅行商品を表彰する ASEAN ツーリズム・アワード・ジャパンのサステナブルツアー賞を受賞。また異文化交流では、沖縄から紅型の職人を招きワークショップを開催。フィリピンではそれまで“体験“に対して対価を支払うことはないと思われていた所に有料体験を導入。結果は大成功で、有料でも集客できるという意識改革ができたと自負しています」。予想以上の成果に「任務に対する自己評価は 120 点」と、仲里さん。



紅型ワークショップに参加している
現地の子どもたち

この活動で仲里さんが目指したのは、地元へ利益を還元すること、持続可能な仕組みを作ることでした。例えばバードウォッチングでは現場に食事処がなかったことからゲスト用の弁当を企画。南城市のエコ弁当をヒントに、ヴィクトリアス市の野菜でおかずを作りバナナの葉で包んだ『ヴィクトリアス版エコ弁当』を作りましたが、私が離れた後もエコ弁当は続けていると聞いて嬉しかったです。事業は成功を収めました。その道のりは簡単ではありませんでした。「時間のルーズさについては、私もサバを読んで遅れて行くな

どして順応できましたが、苦勞したのは言葉の壁でした。言いたいことが伝わらず何でわかってくれないのだろうと涙を流すこともありましたが、現地のイロゴ語で会話をされると悪口を言われているのではと疑心暗鬼にもなりました。でも、そんな時に助けてくれたのもフィリピンの人々でした。フィリピン人はとても楽観的で仕事で悩むことはありません。彼らの感性に触れているうちに、不思議とですが、次第に楽しく仕事ができる方がいいし、がんばり過ぎなくてもいいのではと思うようになりました。南城市役所に戻った時、もくもくと仕事をす様子を見て少し寂しい気持ちになったくらい感化されました」と、笑顔で話してくれました。

フィリピンでの成功体験を胸に、
積極的にチャレンジします!

仲里さんは育児休業から復職したら「南城市とヴィクトリアス市の生徒間交流をはじめ、新規事業にも積極的にチャレンジしたい」と意欲を覗かせます。さらに、沖縄の地域社会の課題でもある子どもの貧困にも目を向け、沖縄の子育て環境に於ける悪循環を自分たち世代で断ち切りたいと考えています。最後に海外協力隊を目指す皆さんに向けたメッセージとして「大変だったけどまた参加したいし、我が子にも行ってほしい。語学など不安もあるかと思いますが、明確な目標や、やってみようという気持ちがあればぜひトライしてほしい」と、エールをくれました。



ヴィクトリアス市のキャラクター「トリイ」と小学校の先生たち





INTERVIEW

とぐちしょうこ 渡久地 正子

浦添市出身。沖縄国際大学卒。留学生向けの日本語教師を経て、日本語指導として日系社会青年ボランティアに参加。現在は、子ども向けに日本語教育を行っている。



・ 派遣国 ・

ドミニカ共和国・ブラジル連邦共和国
Dominican Republic・
Federative Republic of Brazil

・ 活動分野 ・

日系日本語学校教師



ホームステイ先家族からの
誕生日祝い(ドミニカ共和国)

3回目の挑戦で夢を叶える

オンラインなどで日本語の授業を行っている渡久地さん。日本語教師という職業に出会ったのは高校生のとき。外国人が学ぶ日本語は、国語とは違う視点があり興味を持ったそうです。大学で日本文化を学んだあと、名古屋などで留学生を対象に日本語を教えていましたが、非常勤で安心して日本語教師に打ち込める環境ではないことから転職。しかし、日本語教師を続けたいという夢は諦められなかったといいます。

「大学進学のための試験合格用に日本語を学ぶ留学生と違い、それぞれのレベルやペースに合わせて教える子ども向けの日本語教育に興味がありました。国内には子ども向けの教室が少ないため海外を視野に探していたとき、たどり着いたのが JICA の日系社会青年ボランティア



Japan International Cooperation Agency

OKINAWA

(現・日系社会青年海外協力隊)でした。実は2回も不合格でした。これで最後と挑んだ3回目でやっと合格、うれしいと同時にホッとしました」。

日本語に興味を持ってもらうため 多方面からアプローチ

最初の派遣先ドミニカ共和国では、全土に広がる日系人社会で日本語を教えるため、バスで5時間かけて移動することもありました。「ガタガタ道に揺られて車酔いすることもあり体力的にきつくて忙しかった記憶しか残っていません。ただ人々は明るくて、歩いているとよく声をかけられました。授業以外では、海外協力隊の仲間と一緒に日本人が初めて入植した地域を見学するツアーを企画しました。生徒の両親も参加する大がかりなイベントの準備は大変でしたが、「日系人のアイデンティティを見つめるきっかけになった」と喜ばれやりがいを感じました」と当時を振り返ります。



七夕飾りの前で生徒と現地教師と(ブラジル)

短期で派遣されたブラジルでは、一カ所の日系人社会で日本語教師を務めました。現地の日系ベテラン教師との共同授業では、古い教材を使った昔ながらの教授法に戸惑うことも。それに対して派遣前訓練で教わった「現地のやり方を否定せずに、まずは観察する」を活かし冷静に対応し、調和を心がけました。他方で日系三世の5歳~17歳の生徒たちの日常会話はポルトガル語なので日本語が話せなくても困らないため、「日本語に興味を持って通ってくれていたブラジル人の生徒の方が熱心」といったように学ぶ姿勢の課題も見えました。そこで日本語に興味をもってもらうため、体を使った体験型の授業内容にしたり、季節行事の工作づくりをしたり、日本語を通じ



た近隣の日系人社会との交流会を開催するなど日本文化を伝えながら、生徒のモチベーションアップに力を入れました。

また、「偶然にも大家さんの苗字が山城さんで、沖縄から来たというだけで、大家さんの親戚の方が自宅に招いてごちそうしてくれました」と現地の人々との交流が強く印象に残っているといいます。

海外協力隊での出会いは大きな宝

「帰国後は派遣先の沖縄県系人の方3組が沖縄に訪ねてきてくれました。これも海外協力隊での出会いがあったからこそ。これまでの人生では考えられなかったこと」で、宝だといいます。

現在は、オンラインで児童生徒向けの日本語レッスンを行っており、レッスンでは派遣時から使用しているテキスト『にほんごドレミ』を使用しているそうです。

「はじめはオンライン授業に苦労しましたが、今では限られた画面の中だからこそ集中力が高まり効果が高いと感じています。これから海外協力隊を目指す方には諦めずに挑戦し続けたいと思います。3回目で合格した私だからこそ言えます」とアドバイスする渡久地さん。これからも子ども向け日本語教育に携わりながら、「楽しいだけでなく身につく日本語を教えたい」と次なるステージへと進んでいます。



近隣の日系日本語学校との交流会(ブラジル)